

根本有部律衣事に引かれた物語と詩節

松村恒（大妻女子大学教授）

1. 大部な根本有部律

律蔵は僧侶の生活のきまりと教団の運営のための規則から成り立っているが、規則の条文に関わる種々の説明が付加されている。この説明が付加されるものが広律と呼ばれるもので、いくつかの部派のものが伝えられており、いずれも大部の文献となっている。とりわけ根本有部律は他部派のものに比べて非常に大きい。条文の数と内容は部派の間に異同はあるものの、大雑把に言えば同様の傾向にあるといえる。根本有部律が他部派に比べて大きいといっても、条文の数がその分多いとか、条文の表現が長くなっているというわけではない。とくに経分別の波羅提木叉と呼ばれる条文は全部派を通じた共通態すらある程度想定できるほどの相応性を示しており、健度部の各主題も完全に一致するとまでもいかないにしても共通の構成を背後に想定することは検討はずれではない。それでは基本が類似しているのに、根本有部律はどのようにしてより大部なものになったのか。広律では共通の基本部分に対して説明が付加されたと前に述べたが、そこには条文が設定されるための因縁譚・条文の語釈・条文改訂の経緯・条文適用の事例が説かれる。語釈の場合を除いていずれの場合も例話をもって説かれるのであるが、この例話の数が異常に膨れあがっている。まるで物語集を編纂しているかのような感を与えるのであるが、律本来の部分は仔細に読解すれば、きちんと機能していると言える。しかし本来の部分ではない付加の部分がどうしても眼を奪われがちで、その意味では律の機能を一義的に考えて編纂していたのかどうか疑わしい面もないではない。

2. 衣事の構成と羯恥那衣事との関係

健度部で比丘の衣を主題とするヴァストゥ（事）は二つある。即ち羯恥那衣事と衣事である。前者が羯恥那の有効期間¹⁾を細かく規定することに殆ど終始しているのに対し、後者の場合はパッチワークである衣の起源を説いたりする本来の部分もしっかりと押さえられてはいるものの、賢女ヴィシャーカーと名医ジーヴァカの物語が中心的な様相を呈し、更にそれに加えていくつかの本生話まで置かれて、本来の律としての衣の規定はこれらの例話に埋もれてしまっていて影が薄くなってしまっている。現存の広律はどの部派のものも程度の差はあれ、例話を多く含みそれが文献全体のかさを大きくしているが、根本有部律の場合はそれが極端で、物語の収録が主眼で律文献の本来の機能を果たしていなかったのではないかと疑われたこともあった。しかし律プロパーの部分も仔細に検討すれば、他部派の律の根幹部分に相当する部分は大体保たれているので、やはり同部派の律蔵の役割は果たしていたものと思われる。

羯恥那衣事と衣事は比丘の衣を主題としたもので、連続して配置されているのも当然のことであるが、羯恥那衣事は規則の設定されるための短い因縁譚を除けば長い例話は皆無であり、この点で根本有部の他の?度部とも随分と変わっている。これに対して衣事は前述の様にかなり長いヴィシャーカーとジーヴァカの物語を中心であるかのように据え、それに加えて短い本生話を加えている。もちろんその間に衣に関する分類と規定はしっかりと行っているのだが、今「その間に」と述べたのは誇張ではなく、律の規定の間に物語りが配置されているというより、物語の間に本来の律事項が置かれているのである。そこには羯恥那衣事とも内容が連動することがらもあるので、編纂者はこの二つのヴァストゥ／事を同時に念頭においていたことは疑いないので、例話の配置にあたって一方にのみ挿入したのは、二つのヴァストゥ／事が類似の主題を扱っているので、形態の上でも区別をつけて、健度部全体の中でも両者が相補い合う関係にあること、住み分けがうまくゆくようにとの配慮が働いたのではなかろうか。

3 衣事中の本生話

従って衣事の研究にあたってはヴィシャーカーとジーヴァカの二つの物語がその主題として最も興味深いものとなるのであるが、実は筆者は衣事の新しい校訂本の原稿を脱稿し、このふたつについてはそこで論じているので、ここではやや付加的な位置を占める本生話について言及したい。

王の病を治すために医者 of 提案により鳥追いが鳥を捕まえてくるのであるが、最後に愚かにもそれを放してしまうという物語である。最後に鳥が偈を唱えて物語りの終結となるのである。その偈 2) とは

purvam tavad aham murkhah pascac chakuntika ime /
tato raja ca vaidyas ca sampurnam murkhamandalam //

であり、その西藏語訳 3) は

re zhig thog ma bdag blun te // phyi nas bya ba 'di dag go /
de nas rgyal po sman pa ste // blun po'i dkyil 'khor legs par rdzogs //

である。

物語自体は類似のものは膨大な仏教説話群の中にいくつか指摘できるが、ぴったりと一致する同話はない。

4 仏教外文献との関連

ところが今引いた偈は次のものを連想させる。

purvam tavad aham murkho dvitiyah pasabandhalah /
tato raja ca mantri ca sarvam vai murkhamandalam //

完全に同一ではないが、衣事の偈と同じものが派生の段階で異読を生じたものであると推定できる。パーダ a の同一、purvam ... divitiyah ... tato という三段階で愚か者を列挙してゆく構成、pasabandhalah と sakuntika という類義語への置き換え、パーダ c の構成の同一性、sarvam / sampurnam と三段階をまとめる

手法、*murkhamandalam* という同一キーワードの使用という点がその推定を支えるものである。後者の偈はプールナバドドラによるパンチャタントラ中の一話の終わりに 4) やはり鳥により唱えられる偈である。パンチャタントラ系には夥しい伝本があり、プールナバドドラのものはヘルテルにより *Textus Ornator* と名付けられたが、あとこの偈を含むものは *Textus Simplicior H* しかない。この両本はこの偈とこの偈を含む物語を殆ど同文で伝えている 5)。このパンチャタントラ系の物語の訳や紹介は既にいくつもあるので 6) ここに繰り返す必要はないが、鳥が捕まえられてまた逃げるといっておおまかな筋立てに共通なものはあるものに、同話であるというにはやや躊躇を覚えるものである。

以上から推測されることは、偈は物語を配置する上でのインデックスとして暗記されていた。これは宗教集団を超えて共通のものであった。プールナバドドラはジャイナ僧であり、また上述の二つのパンチャタントラ系の伝本はジャイナ伝本と呼ばれることもあるが、特にジャイナ教的な様相があるわけでもない。物語集に関心のあるジャイナ僧がヒンドゥーの物語を伝えたと考えてよいであろう。このインデックスから、これまた宗教の枠を超えて古代インドに広く共有されていた物語のストック 7) から、偈に関連する物語が引き出されて配置されたのであろう。

5 南方伝承からの補足

筆者がこの「小鳥の教訓」という小話について最初に言及したのは四半世紀も遡る 1979 年 5 月 13 日のオークランド大学で催されたアジア学会での口頭発表である。そこでは *Le lai de l'oiselet* と呼ばれる中世フランスのレの平行としてパンチャタントラ系から上述の二伝本を指摘し、更に漢文大蔵経から関連するものを引き出すのが主眼であった。その際パンチャタントラ系には *Textus Ornator* と *Textus Simplicior H* の二つしか見付けることができず、北方伝承でもすべての伝本にあるわけではないので、南方伝承にはもう無いだろうと勝手な思い込みがあり、それ以上の探索の労力を怠った。この背後には語学

力の貧困さ並びに学習意欲の欠如といった研究者としての正しい姿勢が確立していなかったことが作用している。南方伝承すなわちヴァスバーガの伝承の現存最古形を体現するドゥルガシンハ・パンチャタントラはカンナダ語の版しか残っておらず、とても手が出ないと初めから射程内に置かなかったというのが真相であった。その後古ジャワ語タントリ・カマンダカの研究に手を染めるに到り、ヴァスバーガの系統が極めて重要な位置を占めていることを知り、看過できないものであるとの認識に到達した。この系統にはより後の段階に属するものとはいえ、サンスクリット『タントローパークヤーナ』があり、これを繙けば容易に知り得る筈であった 8)。遅ればせながら以下に該当話の和訳を呈示して、これまでの欠の補足としたい。幸いにも Artola が再校訂した十話 9)の中に入っているので、その本文を底本とした。

== * * == * * == * * ==

サールヴァバウマという名のとある王がらい病を患い、医者を呼んで言った。「この病を取り除く者があれば、良く敬意を払おう」そこで首席医師が言った。「もし共命鳥が連れて来られるならそれにより病を取り除いて進ぜましよう。」これを聞いて王は鳥刺しを召して「よろしき各々方は余に共命鳥を連れて参れ。されば敬意を払おう」と言った。その中のひとりの鳥刺しは「連れて参りましょう」と言って、罾を持って森に入って行った。そこで雪山の脇にマーラティーという蔓草で取り囲まれ、とても柔らかな蓮の繊維を持つしなやかな紅蓮・黄蓮・青蓮・白蓮の薫香を求めてそこに溶け込んだすべての水性の三種の香料にも似た心地よき湖に到達した。その湖で共命鳥の習性を知っている彼は罾を広げて〔湖に〕投げた。一方共命鳥は鳥刺しの行動をすべて見ていて、その場所に来なかった。共命鳥の友達である或る蒼鷺が罾に掛かってしまった。それを見て共命鳥は「君を放してあげよう」と〔自ら〕仕掛けに落ちた。そこで隠れていた鳥刺しが共命鳥が仕掛けに掛かったのを見て、喜び「売ってやるぞ」と言った。すると共命鳥は鳥刺しに言った。

「あなたに金を八貫分あげるから、私を放して下さい」鳥刺しは「生まれてからこの方鳥ばかりを殺してきた。どんな鳥からも金をあげようなどと言われたことはなかった。だからお前の言葉は信用できない」と言って、共命鳥を捕まえて、王に示した。医者は共命鳥を持って行って、めでたき玉座に王を座らせて金でできた千の壺をすべての聖地の水で満たして、右手で共命鳥を王の頭に置いて押さえつけ、聖地の水で浄めを行った。共命鳥の上から撒かれた水が王に降りかかった。すると忽ち王は病気が無くなった。王は回復すると喜んで何も考えることなく共命鳥を放した。医者には百村を与え、鳥刺しには穀物の壺と酒の壺を与えた。共命鳥は宮殿の先端に止まって詩句を唱えた。

「大王よ、この大地に三種の愚人あり。

おんみ、鳥刺し、及び共命鳥なる我なり。

どうして愚かさがあるかというならば、私は仕掛けを見ていながら陥りました。鳥刺しは私から金八貫分を与えられるのに取りませんでした。それからあなたは私を捕まえながらも放してしまいました。もし私の肉を食べたなら、老いも死もやってこなかったでしょうに」と言うとき空に飛び去った。王は答えずに、おもむろに寢床に向かうと、落胆したのであった。

== * * == * * == * * ==

ところで **Artola** は何故十話だけを再校訂してのだろうか。いろいろと忖度すると、この十話は北方伝承にないものが選ばれている。つまり既に全体の印刷刊本は出ているものの、トリヴェンドラムの有名なサンسكريット・シリーズに収められてはいるものの、刊行部数はそれほど多くなく、どこでも容易に見られるものではないということ、また梵文本文に不満があったのかもしれない。よく知られている北方伝承所収のものと共通のものを除いて、そうでないものを再度校訂して最初の刊本よりかは流通度の高い雑誌に掲載したのは妥当な処置といえよう。

ここの矛盾がある。筆者は北方伝承に属するジャイナ伝本に対応するものが南方伝承の『タントローパークヤーナ』にあり、**Artole** の再校訂の十話の中にたまたま入っていたということで上に和訳を与えた。一方 **Artola** の十話の選択と

いうのは北方伝承に対応がないものという基準で選ばれていると紹介した。これは筆書も **Artola** も誤っているわけではなく、認定の仕方というか、スタンスの違いに由来するといつてよいかと思う。**Artola** は勿論上述のジャイナ伝本所収の物語について熟知しているのであるから見落とししたのではなく、同話とは見なさなかつたのであろう。鳥を一旦捕まえて逃がすという筋立てで共通はしていても、確かに全体的な進行はかなり異なっている。南方伝承の研究の先鞭は **A. Venkatasubbiah** であるであり、インド外の伝承をも含めて精力的に未知のものを明らかにしていった。しかし所収の物語を指摘して諸伝本の間関係をうかがう重要な手掛かりを呈示してくれたものの、テキストもしくはそれに密着した翻訳が提供されたわけではなかつたので、一般にはトリヴァンドラムのシリーズに梵文テキストが収められるまではひとつの伝承の全体像をつかむのは専門家以外には容易ではなかつた。しかもトリヴァンドラムの刊本もそれ程流布したわけではなかつた。初めての包括的な研究は **V. Huilgol** のもの (10) を待たなくてはならなかつたが、その書にも南方伝承にも特有で北方伝承に対応がないもののリストがあり、その中に本話が含まれている。すなわち **Artola** と同じく同話とは見なさなかつたのである。同話であるか否かの判定基準には万人が認めるものはまだ存在していないからそのように判定することに異論はない。また **Artola** の抜粋は紹介の必要から完全に一致していないものをも含めて紹介しておくことにはそれなりの意義があつた。しかし **Huilgol** の場合は研究であるから、こうした同話か否かの境界線上にあるものの扱いは慎重を要するし、また特に興味を惹く問題でもある。少なくとも注記くらいはあつてしかるべきであつたらう。いつも鍵になるのは偈であるが、この物語の偈は次の通りである。

trayo murkha maharaja krtsne 'smin prthiviale /

bhavan sakunikas caham jivamjivaka eva ca //

maharaja sakunika aham (= jivamjivaka) という三種の **murkha** が列挙されているということで、上に挙げた二種の偈と同一内容である。北方伝承の偈とは三項目のうち二種までは一致し、獵師=鳥追いに相当する部分が南方では

sakunika 北方では pasabandhala と異なっているが、衣事の偈はその部分が sakuntika となっていて両者を繋ぐ役割を果たしている。

6 結語

以上三種の伝承の「小鳥の教訓」の小話をみると、同一とは言い難い面があるが、さりとて全く別の話とするのにも躊躇を覚える。それは物語の終結部における偈の内容である。一旦は人間に捕らえられてしまう愚かな鳥、そして折角捕らえながらも最後には放してしまう人間——獵師と王（及び王宮の大臣とか医者）——が愚か者として列挙されているということで、明らかに起源は同一の偈である。パンチャタントラ系北方伝承と衣事の場合は同一の偈のそれぞれの伝承途上でヴァリエントが生じたための読みの異なりというのが想定できるが、パンチャタントラ系南方伝承の場合は偈の主題は同一であるも、表現形式の違いは伝承途上で生じたヴァリエント程度のものではない。先に偈は物語を引き出すためのインデックスであると想定したが、その偈を引き出すためのキーワードが更に深層部にあったのであろう。ここでは<愚か者><鳥><王><獵師>といったものが組み合わさって、既存の偈が引き出されたり、あるいは内容に即した偈が作製されたのであろう。そうしてその偈から、その偈の内容に合致する物語が、膨大な物語のストックの中から選ばれて物語集のその位置に配当されたのである。

我々は今三種の伝承を比較することによって、物語集編者の編集テクニックの一端を窺うことができるのである。

註

1) 羯恥那の語の意味するところは一律ではなく、またそれぞれの意味も必ずしも明確ではなかった。特にベッヒェルトの一次資料を読みこなせないまま書かれた不正確な論文は、欧米の研究者に悪影響を及ぼした。こうした誤解をたびたび正すことに努めてきたが、最近のものとしては「羯恥那衣

事中の羯恥那の語について』『木村清孝博士還暦記念論集 東アジア仏教—その成立と展開』（東京：春秋社，2002），421-431.

2) Gilgit Ms, folio 272v.

3) H 161v3.

4) Johannes Hertel, *The Panchatantra ... Purnabhadra* (= Harvard Oriental Series 11) (Cambridge, Mass., Harvard U.P., 1908), pp.216.21-22 [III.193].

5) 梵文の所在、翻訳等の書誌的事項は、その他のパラレルをも含めてすべて次のものに記してある。

「物語伝搬における仏典の役割—「小鳥の教訓」を一例にして—」『日本仏教文化研究』3 (1982), 108-126=『四天王寺』50 (1982.9), 38-56; "Le lai de l'oiselet in Oriental Literature," *Kalyana-mitta: Prof. H. Nakamura Felicitation Vol.* (= Bibliotheca Indo-Buddhica 86) (Delhi: Sri Satguru Publications, 1991), 1-14. 「ガストン・パリソと物語インド起源説」(= Anal. Ind. IV)『親和女子大学研究論叢』24 (1991), 51-56 にも近世日本の文献からの補足がある。

6) *Textus Simplicior H* というのは有名なベンファイの訳註の底本となったもので、昔話の研究者によりよく知られているパンチャタントラというのはこの伝本である。ただしコーゼガルテンにより編纂された梵文原典は今日顧みられることがなく、かつ入手閲覧も容易ではないので、ベンファイへの参照上同系統の新しい梵文エディションが望まれる。

7) 根本有部律の編者によるその利用状況は、Jampa Losang Panglung, *Die Erzählstoffe des Mulasarvastivada-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung* (Tokyo: The Reiyukai Library, 1981) により知ることができる。同書は律に採択された物語と平行するものを多々指摘しているが、仏教外のものも随分とそこに見いだすことができる。

8) とはいえヴァスパーガ系内でも「小鳥の教訓」はどの伝本にもあるという訳ではない。このサンクリット本以外の東南アジアの伝承については、Louis Finot, "Recherches sur la littérature laotienne," *BEFEO* 17 (1917), 108.

9) George T. Artola, "Ten Tales from the Tantro-pakhyana," *The Adyar Library Bulletin* 29 (1965), 30-73. なお editio princeps の該当箇所は、K. Sambasiva Sastri (ed.), *Tantro-pakhyana* (= Trivandrum Skt. Series 132) (Trivandrum: Government Press, 1938), 38.23-39.25.

10) Varadraj Huilgol, *The Pancatantra of Vasubhaga: A Critical Study* (Madras: New Era Publications, 1987), 83.

要旨

根本説一切有部律中の衣事は律本来の部分である衣に関する規定の部分に加えて、物語を多く含んでいる。賢女ヴィシャーカーと名医ジーヴァカの物語は分量も大きく衣事の中の二大物語ともいえるべきものであるが、その他に小さな本生話も含まれている。その本生話の一つが「小鳥の教訓」であり、散文で物語りの進行を説き最後に偈で締め括るのは、よくある型である。

これと同じ起源に遡ると思われるものがパンチャタントラ系の北方伝承の中に認められる。物語の終わりに与えられる偈も共通部分が多く、同一起源の偈と見なしてよい。

またパンチャタントラ系の南方伝承にも小鳥が教訓を説く物語がある。これは従来学者によって北方伝承の「小鳥の教訓」の物語と対応するものとは見なされなかったが、この南北の伝承に更に衣事所伝の物語をも対照させると、衣事の物語は南北の両者とそれぞれ共通する部分を合わせもっており、両者をつなぐ役割を果たすものであることがわかる。

物語集の編者は、キーワード、偈、物語の順にストックの中から引き出してゆくという編集のテクニックを用いたということもわかる。

【キーワード】 根本有部律衣事, パンチャタントラ系北方伝承, パンチャタントラ系南方伝承, 小鳥の教訓

ABSTRACT

A Story and a Verse quoted in the *Civaravastu* of the Mulasarvastivadins

Hisashi MATSUMURA

The *Civaravastu* of the Mulasarvastivadins contains not only the exposition of monks' robes but also some narrative stories. The most noticeable ones among them are stories of Visakha and Jivakas. Besides these two big stories some smaller Jatakas are contained. One of them is "A precept of a bird" which concludes the story with a verse as most usual Jataka stories do.

We have a similar story in the Northern tradition of the *Pancatantra* cycle. Judging from the close similarity of the construction and the content of the concluding verse, it is probable that these two traditions of the story could go back to the same origin.

In the Southern tradition of the *Pancatantra* cycle, we find a story of a bird which gives a precept. At the first sight it appears that this story of the Southern tradition does not have close connection to the above said story of the Northern tradition, but taking into consideration the relevant story of the *Civaravastu* we can conclude that these three traditions of the story may share the same origin. We cannot underestimate the linking role of the *Civaravastu*.

[Key Words] *Mulasarvastivadacivaravasutu*, the Northern tradition of the *Pancatantra* cycle, the Southern tradition of the *Pancatantra* cycle, A precept of a bird